

ら、身のまわりの事象に五感を働かせ、それをことばでスケッチさせれば、ふくらみのある文・文章を書くことができるであろう。

- 「五感を働かせる」とは
視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚を五感といい、それぞれの感覚を働かせ、事象をくわしく見つけさせること。同時に、これにともない、心的作用をもふくむ。

- 「観察観点表」とは
児童に目や耳などを使ってよく観察しなさいと言っただけでは、何を、どのように観察するのかわからない。そこで、次のような表を利用させることによって、観察の観点を明らかにするとともに、比喩、擬態(声)語などを使って事象をくわしくスケッチすることを目的とする。

様子を書く場合の表

給食のおかず「カボチャポタージュ」を食べて

五感	目	口	耳	鼻	からだ全体
観 点	物の量 形色明… の名 暗	味 舌歯… ざごわたりえ	音	におい	手ぎ 温痛… ざわり 度さ
観 察 し た こ と	かぼちや 多い、大きい おおき形 黄色、ふか緑	あまい		いいにおい	あねあつ るばりい けが
擬 態 声 語		ヌルヌル コリコリ と	ポタポタ	プーンと	ネバ ネバ
比 喩	くりのよう な	もみじのよう な にんじんのよう	うに クリームのよ		うとり もちのよ
気 持 ち 感 想	かぼちやはあ まり好きでな いの	なおいしそ うない	これならも つと食べたい		そおいしく な

- 「文、文章がふくらむ」とは
 - ・ 一文に使われる文字数が多くなること。
 - ・ 一文に使われる修飾語の数が多くなること。
 - ・ 文章全体における文の数が多くなること。
 - ・ 文章全体における文字数が多くなること。
 - ・ 文章の内容が質的に向上してくること。

- 質的な向上を評価する観点

第1段階 五感で認知した事象の表現が少ない。

第2段階 五感で認知した事象の表現が羅列されている。

第3段階 五感で認知した事象が、文としてまとまりよく表現されている。

第4段階 五感で認知した事象の表現が工夫され、自分なりの感想、意見が述べられている。

第5段階 五感で認知した事象を選択し、表現を工夫しながら主題が明確である。

3 計 画

- (1) 方法 一群法による
- (2) 対象 6年1組35名 (男17名 女18名)
- (3) 組織 個人研究
- (4) 日程
 - ① 第一期 事前研究の段階 (6月～8月)
 - ア 研究計画の樹立 6月～7月
 - イ 実態調査 6月
 - ウ 研究主題の設定 6月
 - エ 文献研究 6月～8月
 - オ 仮説の設定 6月～7月
 - ② 第二期 検証の段階 (9月～10月)
 - ア 教材研究と指導計画の作成 9月
 - イ 事前テストの実施 9月
 - ウ 検証授業 10月
 - エ 事後テストの実施 10月
 - ③ 第三期 整理の段階 (11月～12月)
 - ア データの処理 11月
 - イ 結果の分析 11月
 - ウ 研究のまとめと反省 12月

4 概要と考察

- (1) 研究の経過

- ① 文献研究

ア 文字量の多少は、そのまま作文能力の価値的な意味は示さないともいえるが、文字を書く力、文を組み立てる力、文章としてまとめるというような、作文の基礎的な能力の潜在性をはかるひとつの手がかりとなる。

「小学生の言語能力の発達」

国立国語研究所 明治図書